

石垣原合戦の背景と原因

矢島 嗣久

一、石垣原合戦の遠因

建久七年（一一九六）、このころ大友能直が豊前・豊後守護、鎮西奉行として豊後に入国したといわれる。大友能直は豊後大友氏の初代にあたる。しかし、鎌倉や京都に滞在し、実際に豊後へ入国したのは三代大友頼泰の時代といわれている。

天文一九年（一五五〇）二月に、大友二階崩れの変が起り、二〇代大友義鑑が倒されて、長子の義鎮が二十一代を継いだ。義鎮はのちに宗麟と称した。

天正八年（一五七三）、大友宗麟義鎮は、二十二代の家督を長子義統に譲った。当時、宗麟は四四歳、義統は一五歳であった。義統はのちに秀吉から一字をもらって吉統と名乗るようになった。

天正一四年（一五八六）三月、宗麟は薩摩島津軍の豊

後侵入に備えて、大阪に登り豊臣秀吉に援軍を求めた。

同年十月、九州制覇を狙う島津軍が、日向・肥後方面から豊後に攻め込んだ。日向筋の島津軍を迎え撃った吉統は、戸次川（現大野川）の戦で秀吉の命に背き攻撃をしかけて、秀吉から救援に派遣された土佐の名将、長宗部元親の長子信親を戦死させ大敗した。戦に敗れ吉統は府内から高崎山城に退き、高崎山城が攻められると豊前の竜王城（安、心院町）まで退却した。いっぽう、宗麟は臼杵の丹生城で島津軍の攻撃を支えて城を死守した。これが、豊後小藩分立の遠因となった。

宗麟は翌天正一五年五月に津久見で死去した。吉統は戸次川の敗戦で豊臣秀吉の不興をかい、同月、秀吉は吉統の所領から京都・中津・築城・上毛・下毛・宇佐（妙見岳城竜王城を除く）の豊前南部六郡を黒田如水孝高に

与えた。

文禄元年（一五九二）三月、大友吉統（義統）は、秀吉の命により豊後の兵六千を率いて黒田長政の軍に加わり朝鮮半島に出陣したが、翌二年の五月に吉統は敵前逃亡の罪を糾弾され、豊後国は没収されて秀吉の太閤蔵入地となつてしまつた。

文禄二年九年、豊後国四二万石は、秀吉によつて大野郡五万三千石を太田一吉（政之）に、直入郡三万三千石を熊谷直盛に、大分郡五万八千石を早川長敏に、海部郡四万五千石のうち二万八千石を垣見直正（寛家純）に預け、他は蔵入分とし宮部継潤を代官として管轄させた。

吉統は周防山口の毛利輝元に一時預けられていたが、文禄二年九月、水戸の佐竹義宣に、嫡子義乗（能乗）は江戸の徳川家康に預替になり、義乗は秀忠（後の二代将軍）に仕えるようになった。

文禄三年（一五九四）二月、秀吉はさらに豊後を再分割して中川秀成に岡（竹田市）七万石、福原直高に臼杵六万石、早川長敏に府内一万二千石、竹中重利に国東高田一万五千石、垣見直正に富来二万石、熊谷直陳（直盛）

に安岐一万五千石を宛がつた。

大友吉統の家老職であつた田原紹忍親賢と宗像掃部鎮次の両名は、朝鮮の役は留守居役であつたので中川秀成に目付与力として預けられた。岡藩では田原は三千石、宗像は二千石を与えていた。

慶長三年（一五九八）に秀吉が没すると翌四年に吉統は許されて、徳川秀忠に仕える長子義乗の家に一時身を寄せていた。

同年秋、丹後宮津の細川忠興は徳川家康から速見・国東郡に六万石加えられたので、忠興は、木付城に松井佐渡守康之と有吉四郎右衛門立行の両名を城代として送りこんだ。慶長五年に合戦のあつた石垣原は松井、有吉の支配地であつた。

二、石垣原合戦の原因

慶長五年の夏、徳川家康と石田三成の関係がいよいよ緊迫してくると、石田方（西軍）の毛利輝元は京都に滞在していた大友吉統を大阪城に呼び寄せて、「旧領豊後を与えるにつき、急ぎ豊後に戻り中津の黒田孝高を破り、

九州を西軍に統一すること」という秀頼の命を伝え、馬百匹、具足百領、長柄槍百本、鉄砲三百挺と銀三百枚を与え西軍に組するよう誘った。吉統は了承して豊後に下る途中、周防上の関に上陸して大島に留まり旧大友家臣と連絡を取った。

旧臣吉弘嘉兵衛統幸は、大友系田原氏の庶流で国東武蔵郷吉広の出身である。統幸は国東の屋山筑城（豊後高田）の城主であったが、大友改易後は大友の庶家である柳川城主立花宗茂の所に客家老（二千石）として身を寄せていた。

統幸は、江戸にいる大友能乗に仕えるため、豊前小倉から乗船して上の関で、豊後の旧領へ入国準備中の主君吉統に出会った。統幸は、吉統に長子能乗が徳川家に仕えており、また天下の形勢も徳川方に傾いていると説得したが聞き入れられず、やむなく死を覚悟して吉統の豊後入りに従うことになった。

三、合戦直前の情勢

豊前豊後では、東軍は豊前中津城の黒田如水孝高と豊

後木付城の松井・有吉（細川忠興）のみであった。

如水孝高の長子甲斐守黒田長政は東軍方として兵五千四百、細川忠興も五千百人をひきいて家康のもとに出陣中であつた。

豊後の西軍方は富来城の垣見（寛）家純、安岐城の熊谷直陳、臼杵城の太田一吉らで、垣見や熊谷は、関ヶ原の合戦に備えて美濃の大垣城に立てこもっていた。

高田城の竹中重利と竹田岡城の中川秀成は中立、もしくは日和見主義であつた。

西軍方の大友吉統は、九月八日に上の関を出帆して、九日夕刻速見郡浜脇に上陸し、直ちに立石村の古屋園の高台に陣をしいた。

中津城主黒田如水孝高は、大友吉統を迎え撃つために豊後へ向けて進発した。黒田軍は九月十日朝、高田城に到着して城主竹中隆重を威圧した。隆重は長子に兵二百をつけて黒田軍に同行させた。

四、石垣原の戦い

慶長五年（一六）九月、大友吉統方は東側の坂本

に吉弘統幸が右翼、中央古屋園の本陣には吉統を補佐して岡から駆け付けた田原紹忍親賢が、同じく宗像掃部鎮次が西側御堂ノ原で左翼のを陣をしいた。

九月十日、合戦の戦端は、細川の家臣松井佐渡守が、

鶴見・立石村の主だった百姓を人質にたてこもった木付城を吉弘統幸が強襲して、切られた。十日夜、黒田如水孝高は国見の赤根峠に到着したとき木付から救援の使者に会い、井上九郎右衛門、野村市右衛門、母里與三兵衛の四隊を木付城の救援に先発させた。大友方は、人質は開放したが黒田軍の救援を知って別府に退却した。

黒田方は角殿山に陣をとり、九月十三日、大友吉統軍と黒田先発隊・木付の松井の連合軍とが石垣原で激戦におよび、その日の夕刻に黒田軍の勝利でおわった。

如水は本隊をひきいて富来城や安岐城を攻撃して、十三日夕刻別府に到着し、実相寺山頂に着陣した。合戦に敗れた吉統は如水の降伏勧告を容れ、十四日、海雲寺で剃髪して投降したといわれる。

鎌倉時代から二二代続いた豊後大友氏はここに終焉を迎えた。

五、合戦以後の豊後

石垣原合戦の翌々日、慶長五年九月十五日、関ヶ原では家康のひきいる東軍が、石田三成らの西軍を打ち破り大勝した。

豊後では同五年、城主のいない安岐城と富来城は如水に攻められて落城した。西軍についた城主熊谷直陳や寛家純らは大垣城内で東軍の内応者らに討ち取られたという。

中立の立場をとっていた竹田の中川氏は、目付与力として預けられていた田原紹忍親賢が、石垣原の戦に中川氏の旗印を無断で担ぎ出したため、大友方（西軍）に加担したかのように見えた。中川秀成は、家康の疑いを晴らすために、多大の犠牲を払って臼杵太田一吉（東軍）を攻め、臼杵城から追放した。豊後は東軍の色二色になった。

黒田如水孝高に投降して中津から江戸に送られた大友吉統は、家康の命で出羽秋田の秋田実季に預けられ幽閉の身となった。慶長七年、実季が常陸の宍戸に転封され

ると吉統もこれに従い、慶長十年（一六五）七月、吉統は四八才で配所（江戸牛込の説あり）において病没した。

慶長十一年、徳川家康は、豊前中津城主黒田長政を筑前福岡五〇万石に、細川忠興を豊前小倉三九万石に転封した。忠興の三男忠利は豊前中津城主となった。寛永九年（一六三二）、細川忠利は、のち加藤家改易後の肥後国に転封され、子孫は黒田氏とともに明治に至るのである。

慶長九年三月、黒田如水孝高が死去する。享年五三歳
慶長十年七月、大友吉統が死去する。享年四八歳
慶長一七年七月、大友義乗が死去する。享年三六歳
元和 年四月、徳川家康が死去する。享年七五歳

引用参考文献

大分県の歴史

昭和六二年 山川出版社

郷土戦史の研究

帝国在郷軍人会大分支部編

平成九年 別府史談会編集抄訳

別府史談

第五号、第十号



石垣原の 古戦場をたずねて

8月24日（日曜日）

別府史談会